

## 2・釜石市の事例 被災地における文化財行政と文化財レスキュー

森 一欽 釜石市教育委員会 生涯学習スポーツ課 主査

### 0. はじめに

平成23年3月11日14時46分に東日本を襲った大地震の30分後に大津波が三陸沿岸地域に多大な被害をもたらした。釜石市内の被害状況は死者931名（11月17日現在）、被災住家数は4,548軒内地震被害は859軒（11月7日現在）となっており、最大で約9,883人が避難所に避難した。

今回釜石の文化財関連施設では郷土資料館及び鉄の歴史館は無傷であったが、戦災資料館は津波に吞まれ跡形もなくなり、旧第一中学校に保管していた郷土資料館資料の一部が浸水した。また、旧釜石鉱山事務所展示室は地震により壁のいたるところにひびが入り、資料も落下のため何点か崩壊した。史跡は橋野高炉跡の高炉石組や日払所の石垣が一部破碎及び亀裂、崩落が見られた。津波浸水地域の遺跡や史跡の文化財標柱はことごとく流された。

被災前、文化財行政を扱う生涯学習スポーツ課は、文化係と生涯学習係、スポーツ振興係の3係で、文化係は課長補佐兼文化係長と埋蔵文化財担当係長、一般事務3名と埋蔵文化財専門職員である文化財調査員（小職）が1名という体制で、この他に郷土資料館に館長（非常勤職員）と臨時職員2名と8月に開館したばかりの戦災資料館に臨時職員2名、そして報告書作製等のための室内整理事業員（臨時職員）4名という体制であった。幸いなことに、浸水地域にいた戦災資料館職員も津波から避難し無事であった。

以下、震災後に釜石市で行った文化財レスキューを含む文化財行政について紹介する。

### 1. 震災後の職員体制

震災直後、職場である教育センターは4月初旬まで避難所となり、その後市民課や税務課などの窓口業務が4月いっぱい行われ、煩雑した状況にあった。

そのような中、年度末ということもあり庶務関係をこなしながら避難所対応や避難者への風呂提供班の業務を行い、4月初めには表向きには課長補佐兼文化係長と埋蔵文化財担当係長、一般事務3名と文化財調査員が1名、郷土資料館に館長（非常勤職員）と臨時職員1名という体制で、課長補佐兼文化係長と庶務担当職員が補助金等の清算業務に追われ、埋蔵文化財

担当係長、一般事務2名及び文化財調査員は避難所対応、郷土資料館長は風呂提供班、臨時職員は廃棄物処理室の電話対応にまわされた。

6月の人事異動では2人減、8月に1名増員となるが新採用ということもあり即戦力とは程遠いものであった。風呂提供班は7月まで業務を行い、埋蔵文化財職員は8月中旬まで避難所対応となった。

また、3月14日から郷土資料館は釜石市社会福祉協議会を主とする災害支援ボランティアセンターとして体験学習室と展示室の一部が使用され、12月までその状況が続いた。

### 2. 郷土資料館の文化財レスキューについて

郷土資料館は釜石市鈴子町、釜石駅の西200m、釜石市教育センター北側に所在する。今次の大津波では郷土資料館の50m手前まで波が到達したが、被災を免れた。展示室の展示資料の何点かは転倒したが大きな被害はなかった。7月末より郷土資料館職員が通常業務に戻ったものの、上記のとおり災害支援ボランティアセンターとして使用されたことから、休館状態であったが、インターネットを活用し、文化財の活用を周知することで釜石の精神的な復興にも寄与でき、今次の震災において被害を受けた文化財への関心も高まるものと考え、7月29日にコラム「まもなく5ヶ月・・・」をUPし、8月1日からインターネット企画展「釜石艦砲戦災展」、11月からは「かまいしの鉄器展」を開催した。

あわせて、8月22日より10月21日までの2ヶ月間、アルソック岩手がボランティア活動をしていただくこととなり、震災前から課題であった内装や資料の展示換えなどを行った。そして平成24年1月28日から部分開館した。

### 3. 戦災資料館の文化財レスキューについて

戦災資料館は釜石市浜町1丁目の釜石市営ビル1階に所在し、釜石魚市場から150mという立地である。釜石市街地は第2次世界大戦の終末期である昭和20（1945）年7月14日、8月9日に連合国軍に艦砲射撃を受けており、多くの市民が犠牲となっており、この教訓を後世に残そうと市民の要望により、郷土資料館から分離させ平成22（2010）年8月に開館した。

今次の大津波は、市営ビルの2階まで達したため、戦災資料館は全壊した。道路のガレキ撤去が完了した3月15日に郷土資料館職員及び文化係職員が現地を確認した。上記のとおり職員対応が難しい状況であったことから、3月下旬～4月上旬に少しずつガレキの中から資料を回収し、砲弾の回収には自衛隊の方々にも運搬を手伝っていただいた。

海側が窓がないことや砲弾など重量がある資料が多かったことから流出は少なく、また戦災資料館がもともと浸水地域である点や人的な体制も完備したものではないことから多くの資料を移設していなかったことが不幸中の幸いとなった。

回収した資料は岩手県立博物館の赤沼英男氏の指導を受け、郷土資料館の資料収蔵庫にスペースを設け、7月2日より脱塩作業に入り、砲弾等はほとんど脱塩された。

3月にはこれらの資料の一部が遠野市立博物館で開催された「震災からよみがえった東北の文化財展」にて展示された。戦災資料館に関しては、現在郷土資料館に統合し、4月に再開館する予定である。



戦災資料館での文化財レスキュー

#### 4. 旧釜石鉱山事務所のレスキュー

旧釜石鉱山事務所は釜石市甲子町第1地割(大橋)に所在し、海岸から約15kmに位置する。震災時小職立会いで、耐震調査(コンクリートコア抜き)が行われており、現状復旧中であった。地震により階段のモルタル壁が崩壊し、展示品も転倒した。余震が続く中、館内の状況を簡単に確認し、教育センターへ向かったが、途中の五の橋(鈴子町と中妻町の境)で通行止めにあい、そのまま、近くの中妻出張所で避難者対応に入った。

そのまま8月まで避難所対応をしていたが、7月1日より、臨時職員を雇用し、上記のアルソック岩手の手伝いにより館内の片付けを行った。



旧釜石鉱山事務所の文化財レスキュー

#### 5. 旧釜石第一中学校収蔵庫のレスキュー

旧釜石第一中学校は釜石市天神町に所在する。今次の大津波は中学校1階すれすれまで到達しており、校舎横の体育館では3月11日、12日は約900人の避難者を収容することとなった。

旧第一中学校の郷土資料館の収蔵庫は、地下にあったため、1m50cmほど浸水した。

7月2日に岩手県立博物館3名と遠野市立博物館3名、山形文化遺産防災ネットワーク5名、釜石市のボランティア1名の手伝いのもと、収蔵庫の清掃と資料洗浄を行った。その後の経過観測も岩手県立博物館に実施していただいている。



旧釜石第一中学校での文化財レスキュー

## 6. 行政文書のレスキュー

釜石市役所は釜石市只越町に所在し、海岸より約200mの高台に立地している。今次の大津波により地下の文書庫や車庫などや第3分庁舎1階、第4分庁舎1階が浸水した。

行政文書は将来的に釜石の貴重な歴史資料となるという観点から、4月26日・27日に国文学研究資料室の高橋実氏と青木睦氏、西村慎太郎氏が被災状況調査を実施し、市役所総務課と協議の上、文書レスキューを開始した。地下文書庫の文書ダンボール約1000箱、2万点の資料を旧第一中学校に運び、乾燥やクリーニング、リスト作成作業を延べ500人日以上のボランティア及び、臨時職員（6月から7月）で実施した。ボランティアの多くは他県の博物館関係や文化財、図書館関係職員で、運搬には災害支援ボランティアセンターを活用した。

平成24年度は経過観察のほか、文書活用に関しての活動を計画していただいている。

## 7. 昆勇郎氏資料のレスキュー

今回の震災では、個人所有資料も甚大な被害を受けた。このうち、釜石の郷土史の第一人者であった昆勇郎氏は釜石市大町に居住されており、奥様のきみ氏とともに大津波により亡くなられた。氏は1階に居住していたが、3階に書庫があり、氏所有の資料は被災を免れた。このことを知っていた方々は小職を含め多くいたが、遺族の消息がわからなかったためそのままにしていたところ、5月6日付けの毎日新聞に氏のご子息昆秀光氏が資料を市に寄贈したいという記事が掲載されたため、この記事を書いた記者からご子息の連絡先を教えていただき、寄贈していただくこととなった。秀光氏は紫波町に居住されているため次に釜石に来る日ということで、5月16日に運搬作業を実施することとし、災害支援ボランティアセンターから6名の人員を手配いただき郷土資料館へ運搬した。また1階で見つかった書籍や書類に関しては図書館に除湿機が寄贈されたことからそちらで一時的に保管してもらった。

その後、臨時職員に寄贈リストを作成してもらい、7月9日に秀光氏から釜石市長への贈呈を経て、1月28日の郷土資料館の開館から小規模ながら昆勇郎氏資料企画展を実施した。寄贈資料は4500点に及んだ。なお、昆勇郎氏資料のレスキューを受け、その後何件か震災に関係なく蔵書の寄贈があった。

## 8. 鶴住居観音堂資料のレスキュー

釜石市鶴住居町の鶴住神社の下に所在する観音堂「小峰山観世音」は33年に一度開眼する十一面観音が奉納されていた。十一面観音は永正7（1510）年作で、平成23（2011）年は

501年目になり、9月に五百年祭を実施するため、盛岡大学の太矢邦宣氏とゼミ学生が何度も調査をしていた。3月11日の大津波では鶴住神社の参詣階段の中段まで浸水し、鶴住神社には約100名の避難者が13日まで避難していた。

観音堂や宝物庫は完全に崩壊し、観音や文書等も流失した。4月から数回にわたり現地入りし、大矢氏と盛岡大学橋本裕之氏、ゼミ学生たちで回収作業を行い、岩手県立博物館に運び（※京都科学の小林泰弘氏と和久田優子氏、那須川善男氏と、三戸部加奈氏により修復された。

平成23年9月18日には「東日本大震災・三陸大津波 犠牲者慰霊・三陸復光祈願 鶴住居十一面観音像五百年特別開帳 護摩供養」を中尊寺執事長・天台寺住職の菅野澄順師と毛越寺執事長の藤里明久師、天台宗ハワイ開教総長の荒了寛師をお招きし開催された。大矢氏の尽力と、地元の方々の熱意が伝わるレスキュー作業であった。

## 9. その他の個人所有資料のレスキューについて

この他に釜石市鶴住居町に所在する麓山神社や釜石市唐丹町に所在する盛岩寺などの資料も浸水したことから、所有者から問い合わせがあった。適切な修復や保存が必要と考え岩手県立博物館に持ち込ませていただいた。

## 10. 橋野高炉跡の復旧について

橋野高炉跡は釜石市橋野町第2地割（青ノ木）に所在する。現存最古の洋式高炉跡ということから昭和32（1957）年に国指定史跡となっており、現在九州・山口の近代化産業遺産群と連携を図り、ユネスコ世界遺産登録を目指している。今回の震災により、高炉の石組や御日払所の石垣がずれたり、一部欠損、亀裂が入ったりした。



一番高炉被災状況（2011年4月10日）

小職は世界遺産登録推進室併任のため史跡保全に伴う協議や地元説明会などをしながら、修復について検討することとなった。当初は現状測量を行い次年度に修復という計画でいたが、亀裂が入った石が最下段であるため、降雪時にさらにひびが入り、倒壊する恐れもあることから本年度は養生を行うこととし、施工業者を探したが、ライフラインや施設等の復旧作業や仮設店舗建設、ガレキ撤去などにより業者が見つからず、地元の橋野町で人夫を雇用し養生を行った。

予算化の関係で、10月議会を経ねばならず、また補助金事業であったことからなかなか進められないでいたが、11月中旬には降雪が始まるため、先行着手という事で、11月15日から作業を開始し12月9日に養生を完了した。その間に2回ほどの降雪はあったが、完全着雪は12月後半であったため作業は無事に終わったが、予想以上に今年度は積雪量が多く、養生を行い正解であった。



一番高炉養生（12月8日）

## 11. おわりに

以上簡単ではあるが、釜石市の事例について紹介した。このような災害があればまずは人的救出やインフラの復旧などがメインとなる。どうしても文化財のレスキューは後回しになってしまう。しかしながら、郷土の歴史や文化はわれわれの精神の支柱である。そしてその象徴とも言うべき文化財の保護や活用は地域の災害からの復興にとって非常に大切なものである。

今回、文化財レスキューを行わなければならない中で、災害対応のため、なかなかできず、せつかくボランティアで文化財レスキューをしていただいた方へも満足な受け入れ体制が取れない状態であったが、釜石市の文化財レスキューをしていただいた多くのボランティアの方々には地域のアイデンティティを救っていただいたことに感謝申し上げたい。

今後も復興に伴う埋蔵文化財調査など多くの事業が目白押し

になるなか、体制が整わないけれども文化財保護をしなければならぬというジレンマ状況は続くと思われるが、多くのご支援や、ご教示いただいた工夫などを糧に何とか乗り越えていきたいと思う。